

発行代表者：鎌田 龍児

編集代表者：入江 陽子

印刷：奥野印刷

2016.06

関西岩手県人会

〒530-0001 大阪市北区梅田 1-3-1-900 大阪駅前第 1 ビル 9F 岩手県大阪事務所内

【TEL&FAX】 06-6344-5969 【ホームページ】 <http://www.iwate-kansai.com/>

今号は「震災特集号」として会員のみなさんの声や、街頭募金、記念行事、視察旅行の様子などを届けします！

会員より①



東日本大震災から満 5 年を経て

松坂定徳（陸前高田市）



故郷の景色全部を飲み込んで全くの別世界に変貌させた 3.11 の大津波。真っ黒いヘドロを巻き込んだ海水が家も親友もさらって行った。あれから早や 5 年が過ぎた。運良くと言おうか、大自然の猛威から命を託された生存者は懸命に生き延

びたが、机も椅子もノートも鉛筆一本もない職場で、自分のできる仕事をこつこつと積み重ね、身の回りを整理して明日への希望に備えて来た。市役所の職員は特に大変であったようである。同僚や先輩を失い、羅針盤のない不安と戦い住民の苦難、困窮を救済するために、自分が被災者でありながら、夜も昼も区別なく避難所をパトロールして住民の不満や要望に応じて來た。

故郷とは、親兄弟の肉親や親戚がその土地に住んで居て、生まれ育った生家が存在し、見慣れた風景が変わりない姿でそこに有るのが「故郷」と思っていた。友人からの電話で目標物が全て無くなり、自宅への入り口さえも分からなくなったり、と知らせてきた。まさかそんなことはあるまいと思って居たが、2 か月後の 5 月に新幹線が一関まで開通したので帰省した。幸い陸

前高田市矢作町にある義弟宅は無事だったので、ここを拠点に矢作町、竹駒町、高田町、気仙町今泉、気仙町長部、大船渡市の市街地区、越喜来地区を巡回してみた。被災当日の気仙沼市の火災風景をテレビ映像で拝見し、市街地は丸焼けになり焼け出された親戚も多いと覚悟していたが、あにはからんや被害は想像よりも少なく、親戚全戸の安否を確認することができた。

5 年間も仮設住宅に住み続けて、これから先も仮設住まいになるのかとボヤく向きもあるが、これまでには、百年、二百年後に残る住宅構想を基に宅地の造成・土盛り(嵩上げ)高台宅地の計画、手続き、土砂の運搬などに時間を要してきたが、これからは自分が住むためのインフラ整備となる。即ち、上水道、下水道、電気、交通網、公共施設の整備を急ぐ必要がある。これからの問題点は、陸前高田市を始め被災各地共通であるが人口の激減対策が何よりも急務である。壮年層なら決断も早いと思うのだが、70、80 歳台の高齢者は先行きを考えると新築住宅の建設には慎重になり、時間が経つ程に決断が鈍ることになるだろう。

これからが、復興への勝負である。歯を食いしばって頑張って頂きたい。(83 歳翁)

会員より②

被災者の心の復興も祈る

70 才代会員

気仙沼のいとこや大槌町の友人が被災して、つらい想い苦しい想いをしております。被災地の 1 日も早い復興と合わせて、彼らの心の復興を心から祈っております。

兄と震災 故郷に心を残して

鈴木綾子（大船渡市）

兄・柏崎驥二は、平成28年4月15日夕6時両親のもとに旅立った。

常にふるさと・三陸吉浜に思いを馳せていた兄であったから、きっと、あの海あの山あの川の吉浜に帰ったのだと思う。

教師として初任校が釜石南高、久慈高にもいた。三陸鉄道開通の昭和59年4月1日は父のお葬式であった。義姉と子供たちもその祝賀の旗が振られる中、お葬式に来たのだった。

兄は20歳の時、「コスモス短歌会」の新人賞「桐の花賞」を受賞して以来54年間、それに結つぱられて（結いと縛るをまとめて言った古い言葉である）、教師として短歌人として苦しみながらも、しかし頑固に短歌の道を進んできた。「自分を安易に譲りたくはなかった」と、亡くなる一日半前に文章に残していた。そのことは、14日の夕方、体の痛さに耐えながら、私に言っていたことでもあった。

兄の歌を拾ってみたい。

「海の灯も陸の灯も人の住むなれば

優しと見守る（まもる）ひとり來し丘」（1971）

「凶作と津波いくたび経てきたる

村なりあをき無花果の照り」（同上読書少年1974）

「いくたびも波の犠牲となりし村

三陸に生ひてわが死なざりし」（歌壇2015/12）

「希ひこし七十四歳の夜明けなり

ふるさと三陸の村が目に見ゆ」（同上）

「災害の北三陸に帰り来し

鮭のはらこをさびしみて食う」（短歌研究2016/1）

「『潮かをる北の浜辺の』啄木の

碑をめぐり去りし泥波の跡」（第7歌集・北窓集2015）

「海を見ぬ日のなく暮らし來し叔母が

津波ののちに衰えて逝く」

「流されて家なき人も弔ひに

来りて旧の住所を書きけり」

「油菜の咲きて雲雀のこゑすれど

避難所の人ら座りて（ねまりて）暮らす」



「天（そら）ふかくなりてひがしにながれゆく
今年の雲はみな死者の雲」

「東北がこのままでいい訳がないどつどど
どうどなにか吹き荒れよ」

「津波より二年経て来ぬこころ重く
訪ひがたかりし釜石の街」

「波の共（むた）ながれし人を思いつつ
小十郎やブドリの最期を思ふ」

「亡き母はすぐたなきなれ肩の斜め
上のあたりに居るときもある」

「よきことを思ひて生きむ傷み負う
地のうへに死ぬいのちなれども」
(以上北窓集より)

亡くなる日の朝、「斎藤茂吉短歌文学賞」受賞の発表があった。4年の闘病は震災と切り離しては考えられない。

「これより下に 家を建てるな」 ～伝承の難しさ～

佐々木伸行（花巻市）



高校柔道部の創部80周年記念号の原稿を書いていた時だった。強敵だった釜石勢、テレビにその釜石に津波が到着した映像が放映されてきました。それから被害がどんどん広がって行く…。定年退職後何年かして見たNHKの失敗学に関するテキスト（タイトル失念）の写真を思い出した。たしか「失敗は忘れる」とのページに、「変だと思いませんか」と有り、古い石碑の下方に瓦屋根が続いている写真だった。写真では良くわからなかつたが、その石碑には「これより下に家を建てるな…」と刻んであるのだそうです（探しても、該当テキスト見つからず、うろ覚えです）。

しかし、それを見てから5年ほどで、その教えを守れなかった結果を知る事に成了った。大災害が現実に起こってしまったこと、何代も伝承して行く難しさをつくづく考えさせられた。日航の事故を例に、現物保存の意義が書かれていた。



昨年を上回る温かい義援金が集まる

～東日本大震災5周年（平成28年）街頭募金～

今年も関西宮城県人会と合同で街頭募金を実施した。3日間ともまことに天候に恵まれ、事前に日程の連絡が出来たこともあり、初めて参加された会員が多く大変ありがたかった。

通行人に外国人が増えたのは5年間の大きな変化である。特に梅田を通り過ぎる人の半分は外国人とおぼしき人の群れで、募金箱に1ドル札や人民元、ルピーそして国籍不明の硬貨も入っていた。

通行人の関心が年々低下していくのはやむを得ない。しかし、神戸や難波法善寺境内では被災地に心を寄せてくださる方が多かった。特に神戸元町では激励の言葉と共に1万円札が4枚もあった。今年も法善寺様より協力金として50,000円が寄せられ、これを含め終わってみれば募金額は695,700円で、昨年を約10万円も上回っていた。また、今年も松本泰州氏や金野衛氏ご一家および奥様の知人から多額の義援金が寄せられ、5年間の募金総額はついに一千万の大台を超えた（10,459,334円）。改めて温かい義援金を寄せられた関西岩手県人会員、関西の皆さんおよびボランティアの皆さんに感謝申し上げます。

今年は法善寺様のご都合で3月6日（日）に大震災犠牲者の法要が行われ、本会から鎌田龍児会長および松坂定徳、柏山喬の両顧問がお参りした。3月11日には午後2時46分を期して神戸に参加のボランティアが黙祷を捧げた（事務局記）。

◎3月5日（土）

場所：梅田 金額：149,625円

◎3月6日（日）

場所：難波 金額：215,587円

◎3月11日（金）

場所：神戸 金額：330,489円

◎ボランティアの皆さん

小山文男、柏山喬、金本栄子、鎌田龍児、河原久美子、菊池満昭、菊地茂昭、菊地巧、熊谷克己、金野衛、酒井清心、佐々木哲夫・奥様、島信子、千葉たみ子、長山幸悦、馬場慶次郎、平田和枝、平田良夫、深田稔、藤井勝、藤原サチ子、松坂定徳、八幡勝栄、和賀亮太郎（継承略、アイウエオ順）



ボランティアのみなさん、本当に疲れ様でした！



三陸の教訓を大阪に

語り継ぐ津波の脅威～東日本大震災から学ぶもの～

東日本大震災 5 周年の公開シンポジウムは 2016 年 3 月 13 日（日）13 時より府立大阪国際会議場にて開催され、約 1000 人にご来場いただき大成功であった。プロデューサーを引き受けたものの、会場がガラガラだったらどうしよう…と気に病んでいただけに終わった瞬間、一気に力が抜けた。

◆ 開催のきっかけとロータリークラブとの共催

「津波が来たら泳げばいいじゃないか…」、南海トラフ大地震が引き起こす津波が、大阪に襲来するかも知れないと話し合っていた時に、ある友人のこの一言が、今回のシンポジウムのきっかけだった。津波を知らない大阪の人達に、何とか津波の実態、怖さを知つてもらいたい…、ずっとこのことを考え続けていたが、問題は費用だった。

県人会には特別予算を組むだけの力はない。ところが身近な所から助け船が出された。大阪御堂筋本町ロータリークラブの会員で、合唱団の後輩今澤哲朗君にこの話をしたら、「面白そうだ、やりましょう」と、意外な展開となった。ロータリークラブでは、震災以来、現地のロータリアンと協力して、社会奉仕の観点から様々な支援活動を行ってきたが、5 年目の節目を

迎えて、何かイベントをやりたいと考えていた。そのうえ、今澤君が次期会長に内定しており、会長在任中に何か意義のあることを…という思いがあったようだ。

◆ 基調講演、コーディネーターの人選と会場探し

ロータリークラブの全面支援をいただくことになり、津波に関するシンポジウムをやろうと実際に動き出したのは、昨年の関西岩手県人会 60 周年記念祝賀会の直後からだった。基調講演は、最初から防災、減災の第一人者関西大学教授の河田惠昭先生にお願いしようと決めていた。コーディネーターは、後輩の元読売テレビアナウンサー辛坊治郎君にと思っていたが、超忙しい彼の事ゆえ、スケジュールを押さえられるか一抹の不安があった。「来年の 3 月 11 日前後で都合をつけられる日はないか?」と尋ねると、「鬼が笑いますよ!」といいながらも、「3 月 13 日（日）を空けておきます」と快く引き受けてくれた。

これを受けすぐ会場探しに走り出したが、目ぼしい会場は、翌年の抽選が済んでおり、なかなか見つからない。府立大阪国際会議場なら、大ホールは改修中だが会議室なら使えるということになり、会議室をふたつつなげて、1000 人動員しようという事になった。



◆ パネリスト人選に県人会関係者のご協力

生々しい体験談を語っていただくパネリストには、首長の立場から、市長当選直後に被災し、奥様を失いながらも自ら陣頭指揮にあたった陸前高田市の戸羽太市長は外せない。県人会の松坂定徳顧問の友人で、理事の菊池満夫氏を通じて市長の出演をお願いした。津波の黒い濁流にのまれながらもポンプ場の屋根により登り奇跡的に助かった大槌町の職員四戸直紀さんには、岩手県庁から大槌町に派遣されていた元岩手県大阪事務所の大釜範之氏にご協力いただいた。津波の怖さを視覚に訴えるために、津波の恐怖と闘いながら取材を敢行した(株)IBC 岩手放送の木下義則さんの出演と映像使用許可には、元当会常任幹事の川上隆常務にご尽力いただいた。またロータリークラブの例会で、救護救急の立場から非常に印象深い話をされていた大阪市淀川消防署の木村忠彦所長も自動的に決まった。私が基調講演、パネルディスカッションの中味を固めていく中で、ロータリーの今澤会長には、後援の大阪府、大阪市をはじめご協力をいただく協賛各社との交渉などに走り回っていただいた。

◆ 水都大阪は日本一危ない都市

基調講演で、河田恵昭教授は「海拔ゼロメートル地帯に多くの人が住んでいる大阪は、日本で一番危ない都市」「水都大阪では、津波は川から来る」「地下鉄、地下街は津波の第1波で水没する」事などを上げ、津波の脅威を知り対策を立てることとの重要性と、大地震が起きたら2時間以内に近くの3階建て以上の建物等に避難することの大切さを強調した。新鮮な驚きとともに聞いた人が多かったのではないかと思う。

◆ パネリストの生々しい体験談と教訓の数々

パネルディスカッションは辛坊君の卓越した采配で活発な発言が相次いだ。戸羽市長は「まさか10メートルを越える津波が来るとは予想もしなかった。常日頃、津波が来たらどこに逃げるかを家族の中で話し合っておくことが必要だ」。津波に飲み込まれながらも九死に一生を得た大槌町の四戸直紀さんは、「避難所の運営の難しさ、燃料の確保、遺体置き場など被災した町民と向き合った第一線での苦労話とともに、自治体は前もって災害に備えておくことが重要だ。また岩手放送の木下義則さんは、「恐ろしい津波のエネルギーを自ら撮影した映像で紹介し、釜石市内の小中学生のほとんどが難を逃れた事など、防災教育と避難訓練の大切さを訴えた。地震発生と同時に、500人の緊急消防援助隊を岩手に急派した淀川消防署の木村忠彦署長(当時大阪市消防局警備方面隊長)は、泥



をかぶった膨大なガレキを手でかき分けながら進めなければならなかった救出作業の厳しさを聴衆に語りかけたが、中でも、車に閉じ込められ男の子をかばうようにして息絶えていた父親と少年を慎重に丁寧に収容した時の話には目頭をおさえる人もいた。

◆ 第2部チャリティコンサートにも多くの助力が

今回のイベントには、多くの人のご助力をいただいた。東西四大学 OB 合唱団(早稲田大学、慶應義塾大学、関西学院大学、同志社大学)が、趣旨に賛同し「歌いに行く」と真っ先に手を挙げてくれたのは本当に嬉しかった。手弁当で何と96人の団員が馳せ参じ、会場は力強いハーモニーに包まれた。また透き通る清らかな歌声で聴衆を魅了した県人会会員のマンドリンシンガー清心さんにもお礼を申し上げる。

◆ 寄せられた温かい義援金と感謝の言葉

会場に置かれた募金箱には、多くの方から約300,000円もの義援金が寄せられた。これらは大阪御堂筋本町ロータリークラブと共同名義で、「いわての学び希望基金」に送られる予定である。「大阪が津波に弱い街であることを初めて知りました。本当に勉強になる良い話をありがとうございました」、聴衆のお一人からいただいた言葉は、何物にも代えがたい重みがあった。

東日本大震災の記憶が急激に風化していく中で、三陸の体験を大阪に語り継ぎ、津波に備えていただきたいという思いはある程度伝わったのではないかと感じている。今回のシンポジウムが、風化にブレーキをかける一端になればありがたいと思うとともに、「誰かを助ける」ことにつながることを切に願う。

全面支援していただいた今澤哲朗会長、高原政巳副会長をはじめ大阪御堂筋本町ロータリークラブの皆さん、会場設営に奔走していただいた森健二さんに紙面を借りて御礼申し上げます。

(関西岩手県人会 会長 鎌田龍児)

東南海地震に備える ロータリーの社会奉仕を再認識

大阪御堂筋本町ロータリークラブ 東北震災支援 PJ 担当 副会長 高原政巳

「公開シンポジウム」は震災から 5 年目の時期となる 3 月 13 日（日）午後 1 時より大阪国際会議場で 1,000 名弱の来場者を招いて開催され、関西大学教授・河田先生の基調講演、辛坊治郎様のリードによるパネルディスカッション、第 2 部のチャリティーコンサートと全て順調に進行し大成功で終了いたしました。

このプロジェクトは大阪御堂筋本町ロータリークラブ(RC)、関西岩手県人会、国際ロータリー第 2660 地区 IM7 組の共同事業として行い、内容としては 2030 年ごろに想定される東南海地震に備えて大阪地区の皆さんへ東日本大震災から学ぶものとして行ったシンポジウムです。特にパネリストとしてご参加頂きました陸前高田市長戸羽様、大槌町総合政策課四戸様、IBC 岩手放送記者木下様、大阪市淀川消防署長木村様は 3.11 の津波をそれぞれのお仕事の立場で体験された方であり、説得力のある内容は参加された方から津波の脅威と減災の準備に参考になったとの感想を多く頂きました。これは終了後にほぼ全員の方より義援金をチャリティーボックスに頂きましたことが証明しています。

また、当クラブは 3 年前に二つのクラブが合併してから初めてとなる大イベントの開催であり、全会員が

終日かかって作り上げ、クラブメンバーの親睦にも大いに役立ったのではないかと思います。

そして何よりも大きな成果は基調講演、パネルディスカッションを通じて誰でも分かりやすい統一見解「いざという時には自分がまず生きること、日頃から家族と避難についての準備をしておくこと」を提言して頂いたことです。

第 2 部はチャリティーコンサートで楽しんでいただき、最後は岩手県出身のマンドリンシンガー・清心(きよみ)さんのリードで「花は咲く」を全員で合唱し、皆さんの大きな拍手で定刻午後 4 時 45 分ごろに全てのプログラムを終えました。この瞬間「全てが無事に進行し感動を与えたイベントの成功」を互いに確認し合い、ロータリーの社会奉仕について新たな認識を共有したように思います。最後の片づけまで全員が残り作業をし、その後二次会へタクシーで向かいましたが、車中で「10 年目は何をしようかな?」と欲張りなことを考えていました。私たちのクラブは震災の翌年から毎年石巻東 RC 例会に RAC と一緒に訪問し、そのあと被災地の視察を行っています。これは合併記念プロジェクトとして 2021 年まで行う予定です。皆さんこれからも東北震災復興支援と東北を忘れないようにしましょう!



震災慰靈碑の前で献花・黙祷 ～盛土、重機とダンプカーが走る復興現場～

4年前の震災1周年に続き、有志8名による2回目の視察旅行である。東北新幹線水沢江刺駅を午後1時半、ジャンボタクシーに乗り込み翌日夕方花巻空港に帰る1日半の視察を実施した。これらの行程作成には永山光悦氏(前大阪事務所)のお骨折りをいただいた。

◎震災遺構前の慰靈碑に献花・黙祷

陸前高田市は被災した旧・道の駅(TAPIC45)の広い駐車場の片隅に震災慰靈碑があった。旧大槌町役場は同じ姿(裏は取り壊されている)で残り、ここには小屋が建てられ、中にお地蔵様を祀った祭壇があった。どちらも永山光悦氏に用意してもらった供花を手向け一同黙祷した。震災ガイドによると、旧・道の駅の建物は震災遺構として残り、旧大槌町役場は解体か保存かで揺れている。肉親を亡くした遺族には悲しみが蘇る場所、陸前高田市は他に中学校と5階建てアパートの3か所を遺構として残す。ガイドによれば全員が助かり死者がない故に残せるのだという。

◎防潮堤と居住地嵩上げに地域差が

前回はガレキが山と積まれていたが、今回は地盤、区画整理の土木工事が始まり、いたるところに盛土がされ、傍らで重機やダンプカーがせわしく動いていた。

陸前高田市の戸羽太市長の説明によれば、奇跡の一本松のある「高田の松原や砂浜」を復元し、旧・道の駅を含む一帯の浸水域は「防災メモリアル公園」として整備する。その内陸に12.5mの防潮堤を築き、内

側を同程度の高さに嵩上げする。そのために、125mの山を巨大破碎機で45mまで削り、全長3kmのベルトコンベヤー(希望の架け橋)で土を運んだという。コンベヤーは役目を終え既に撤去されていた。

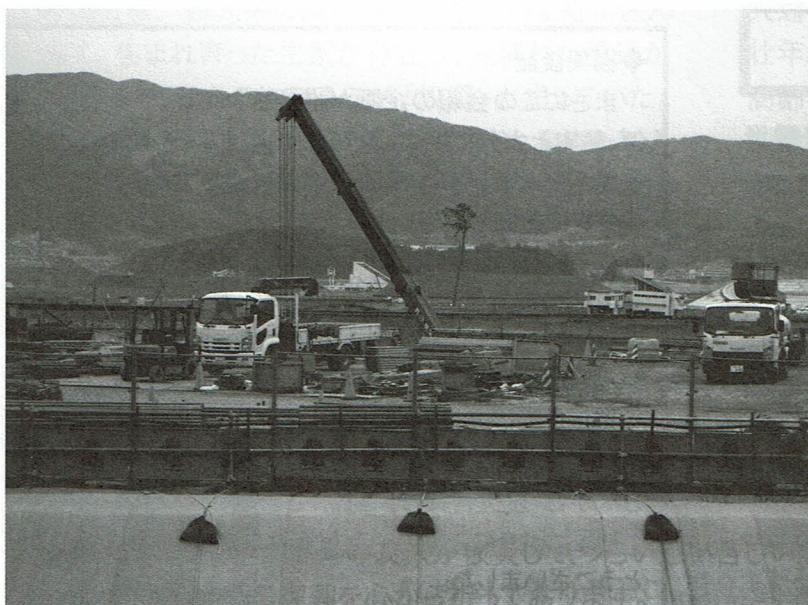
大船渡市はさいとう製菓(株)工場にある「大船渡津波伝承館」を訪問、ビデオ上映と説明を齊藤賢治館長より受けた。陸前高田市と同様に盛土・嵩上げをするが7.5mの高さと聞いた。大船渡湾の湾口に「海面から4m、長さ700m」の防潮堤があったが、今回の津波はこれをやすやすと乗越えてきた。この防潮堤を11.3mに作り直すという。

大槌町は防災シンポジウムのパネリストであった四戸直紀氏にご案内いただいた。防潮堤は7.5mで、津波の乗越えを前提に居住制限地区を遊水地とし、居住区は3mの嵩上げにとどめる。その代り津波に負けない高層アパートを作るという。海の見えない高い防潮堤には反対も多い。地域の実状に合わせた復興計画があった。

◎市長表敬訪問と遠野市総合防災センター見学

防災シンポジウムのパネリストをお願いした陸前高田市の戸羽太市長、津波で九死に一生を得た大槌町の平野公三町長、元岩手県副知事の濱田氏の部下であった本田敏秋遠野市長にお会いすることが出来た。陸前高田市も大槌町も膨大な費用で居住地を整備しているが、人口が戻るかどうか不安を抱えている。遠野市は震災に際し、本田市長の素早い対応で後方支援基地として大きな力を発揮した。総合防災センター(消防署)に「3・11東日本大震災後方支援資料館」を開設し、教訓を全国に発信しているのには感銘を受けた。

被災地の街づくりはようやく実施段階に移った。数年後どのように変貌しているか見てみたい。(深田記)



●三陸沿岸視察旅行

期 間:2016年4月21(木)~22日(金)

訪問先:陸前高田市、大船渡市、大槌町
遠野市

視察者:金野 衛(団長)

濱田明正(元岩手県副知事)

鎌田龍児

藤井 勝

柏山 喬

深田 稔

高橋 聰・真由美(画家夫妻)

永山光悦(岩手県南振興局)

※敬称略

岩手県大阪事務所が新体制になりました

4月の人事異動により古川雄二（次長）と安達健次（主査）が岩手に戻り、福田 晃（次長）と古澤聖子（主事）が赴任しました。

福田は軽米町出身。水沢県税事務所を皮切りに、盛岡地方振興局、税務課など税務畠を中心に、森林土木課、地域企画室、岩手県立大学、健康国保課等で勤務。当所では、全体の総括とアンテナショップの管理運営等を担当。約1年、東京での単身赴任経験があり、2回目の県外勤務になります。

古澤は大船渡市出身。児童家庭課、県北広域振興局、法務学事課で勤務。当所では観光、復興支援等を担当。弘前市で大学4年間を暮らした経験がありますが、入庁から初めての県外生活で大きな期待と希望に胸を膨らませています。

当所は1965(昭和40)年の事務所開設以来、関西における商工観光分野の情報・サービスの拠点であります。今年度は、アンテナショップの開設、岩手県への観光客増、企業誘致の3点を業務活動の柱として重点的に取組みます。



県では、東日本大震災の本格復興最終年となる今年度を「本格復興完遂年」と位置付けており、当所においても、故郷の地域産業再生の支援、情報発信強化など、本格復興のサポートを継続します。今後ともご支援賜りますようお願い申し上げます。

(次長：福田 晃)

新会員のご紹介(11月以降)

藤原サチ子(久慈)、千葉敏行(大阪)、加藤紀子(盛岡)、泉谷秀子(一関)、梅沢慶子(盛岡)、福田 晃(軽米・県事務所)、松野祐亮(広島)、以上7人(会員総数197人) ※()内は出身地もしくは所属。敬称略。

アンケートご協力へのお礼

会報イーハトーブへのご意見・要望と、31号震災特集号へのメッセージ募集を1月の新春懇親会とイーハトーブ30号送付時にお願いをしたところ、10名の方から回答いただきました。どうもありがとうございました。

イーハトーブは岩手と関西を結ぶ会員の交流の場です。いただいたご意見を参考に、これからも誌面の充実を図っていきたいと思います。会報、ホームページ「県人会ひろば」もあわせて、皆様からの投稿や、情報、ご意見、ご感想など(どうぞお気軽に!)お待ちしています。今後ともよろしくお願ひいたします。

新アンテナショップが開店!

岩手県と青森県が大阪市内に共同出店するアンテナショップ「青森・岩手ええもんショップ」の開店が7月5日(火)に決まりました。新店舗の場所は梅田地下街「ドージマ地下センター」。両県の特産品が並ぶほか、イトインコーナーも設置される予定。

◆編集後記

まさにこの会報の企画が進められていた4月の半ば、熊本と大分で相次いで地震が発生し、各地で甚大な被害をもたらしました。この地震により亡くなられたみなさまにお悔やみ申し上げますとともに、被災されたみなさまに心よりお見舞い申し上げます。

東北の被災地では、自らの復興もようやくこれからという状況のもと、「他人ごとではない」「今こそ恩返し」と発災直後から支援の動きが始まったと聞いています。

自然災害は避けられない。しかし、私たちはそこから学び、誰かの力になることができる。そんなことを実感しながら「震災特集号」を制作しました。

紙面づくりにご協力いただいたみなさん、本当にありがとうございました。